

ヨハネ第一1章「神との交わり」

1A ヨハネたちの証言 1-4

1B 肉体を取られたいのち 1-2

2B 御父と御子との交わり 3-4

2A 光に歩む 5-10

1B 光なる神 5-7

2B 罪の告白 8-10

本文

ヨハネ第一 1章を開いてください。ヨハネによって書かれたもの、福音書も、三つの手紙、そして黙示録がありますが、すべて紀元 90 年代に書いています。他の使徒たちはみな殉教して久しいです。ヨハネは、十二弟子たちの中では若かったようですが、その時は 90 歳ぐらいだったことでしょう。その彼は、お父さんのような愛情をもって、最も大切だと思われることを、若い世代のキリスト者たちに書いています。

彼の書き方は、とても素朴です。短いことばで、何度も大事なことばを繰り返して、多くを語りません。「いのち」であるとか、「愛」であるとか、キリスト者としてありふれた言葉を使って、説明していきます。しかし、長老にふさわしく、知恵があります。その何度となくこれまでも聞いてきた言葉に、深みがあります。あまりにも深いので、私たちの心の思いが露わにされ、ごまかしがきかなくなる感じになります。例えば、「神を知っていると言っても、命令を行っていないければ、偽りです。」なんていう言葉をさりげなく言います。

この手紙を、彼の福音書といっしょに読むと良いでしょう。福音書で、ヨハネは体系的に、主イエスの生涯を書き記しています。そして、手紙において、主が語られたこと、命じられたことを、信者たちに対して説き明かしています。

また、警告をしています。この手紙の背景には、これまで使徒たちが警告してきた、偽教師たちの存在があります。イエスが肉体をもって来られたことを否定し、自分たちは知識を持っていると主張して、それで教会の交わりから出て行った者たちがいます。グノーシス主義の影響を受けた異端です。けれども、他の使徒たちがしてきたように、すでに信じている者たちを、その確信に留まるように励ましています。

1A ヨハネたちの証言 1-4

ヨハネは、手紙を、「いのちのことば」として、イエスを証しするところから始めます。

1B 肉体を取られたいのち 1-2

¹ 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。² このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。

ヨハネは、「初めからあったもの」という言葉から伝えます。彼が書いている、この「初め」は、福音書で書いているものと同じです。「1:1-2 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」これが、どれだけ最初なのかというと、創世記1章1節の、「はじめに神が天と地を創造された」より前です。天と地を神が造られる前に、ことばが神とともに、初めからありました。ことばは、神でした。そして、このことばによって、すべてのものが造られました。

そして福音書の1章14節には、このことばが「人となって、私たちの間に住まわれた。」とあります。驚くべきことに、永遠の昔からおられた神が、御父とともにおられた御子が、肉体を取って現れたのです。その肉体を持っていることを、ヨハネは、しっかりとここで書いています。「私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの」とあります。肉声で、神のことばを聞きました。そして、肉眼で、この方を見ました。それだけではなく、じっと見つめました。そして、自分の手でもさわっています。ヨハネは、福音書で「主の愛された弟子」と自分を紹介していますが、自分がイエスに近かったことを証しています。例えば、最後の晩餐において、「13:23 弟子の一人がイエスの胸のところで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。」胸のところで横になっていたのです。

彼は、初めからおられた方が、ここまでして自分たちの間に住んでくださったことを伝えているのです。神が人となるというのは、こういうことなのです。この方に触れている時に、天地を造られた、永遠の昔から生きておられる方に触れているのです。聞いているのです。そして、じっくり見ているのです。ここには、当時、流行っていたグノーシス系の異端の教えである、仮現説を粉砕しています。イエスは現れたが実体なかった、肉体はなかったとします。まさに、ヴァーチャル・リアリティーの中で現れたと、主張していたのです。しかし、決してそうではないのです！

主が肉体を取られたことによって、私たちはこの肉体の中であって、それで神を知ることができます。この方が肉体を取られたことによって、肉体の中に生きる私たちが、目に見える世界の中で、目に見えない神を知ることができるのです。私たちの手に触れることのできる生活の細かいところに、主はおられるのです。決して、精神世界の、抽象的な知識、概念だけの世界ではないのです。そして次の節に出てきますが、身体を持っている私たちが集まっているところに、主が真ん中にいてくださるのです。

そして、この方は「いのちのことば」と呼ばれています。この方にいのちがあり、また語ることはいのちがあります。「ヨハ 6:63 わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」かつては、預言者たちによって神のことばが語られましたが、今は、御子ご自身が、神を語っていることばとなっている、ということです。「ヘブル 1:1-2a 神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られましたが、この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。」

そして、2 節で、「御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのち」と言っています。福音書の中で、「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」とありましたね。いのちというのは、独立して存在しているものではありません。結ばれているからこそ、生きているのです。御子が御父とともにおられるところにある、その交わりにいのちが流れています。

そして、永遠のいのちを彼らに現して、ヨハネは、「私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」と言っています。彼は自分で何かを造り出すのではなく、淡々と、見たことを証して、伝えています。ヨハネにとって、使徒たちにとって、これは、ことばをこねくり回して言い争う議論的ではないのです。私は見た、聞いた。だから語ります、という証言の問題なのです。私たちキリスト者も、同じです。証言する者なのです。自分の信じていること、知っていることを証します。

2B 御父と御子との交わり 3-4

³ 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。

午前礼拝で、ここの部分をじっくりと学びましたが、改めてお話します。主イエスは、捕えられる前に、御父に祈りを献げました。ヨハネの福音書 17 章に書かれています。まず、「私たち」と言っていますが、それはイエスを見て、イエスから聞いている人々のこと、つまり直近の弟子たちのことです。イエスは、父なる神に祈られました。「17:17-18 真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。」彼らが、真理を語るように聖別してくださいと祈られています。そして、世に遣わすと祈られています。ですから、ヨハネや他の使徒たちが、聖別されて、真理のことばを語っている人々です。

そこで、「あなたがたも私たちと交わりを持つようになるため」と言っているのです。使徒たちの語る、神のみことば、真理のことばにあって、交わりを持つためであるということです。このことも、イエスは、御父に祈られていました。「17:20-21 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうち

にできるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」

主が来られるにあたって、私たちが天において、神の民として一つであるように、地上においても、使徒たちのことばによって信じる者たちが、すべて一つになるように祈られているのです。主の祈りがこのようにあるのに、あたかも分裂することがよいことだとしている人々がいます。第一の手紙で、ヨハネが「反キリスト」と呼んでいる人々は、まさにそういう人々です。パウロも、そのことを語りました。「ロマ 16:17-18 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまずきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。」

私たちがキリストにあって、交わり、一つになっている時に、そこには、へりくだりが必要です。相手を自分よりもすぐれているとみなす、尊敬や敬意がなければ一つになれません。そして、忍耐が必要です。自分と考えが異なっているとしても、イエスにあって一つになっているのだと知って、受け入れるのです。そして、私たちが一つになっている時に、神に、キリストに栄光が与えられます。逆を言うと、自分の正しさを主張して分裂を引き起こしている時に、栄光を神から自分に対して奪い取っていることを知るべきです。

しかし、使徒たちの教えによって、イエスを信じている者たちにある交わりはかけがえのないものです。だから、教会はかけがえのないものなのです。何度もお話ししていますが、それは、ヴァーチャルで取り替えることはできません。仮想は仮想でしかないのです。グノーシス主義の異端は、イエスを仮現、仮の現実だと主張していました。まさに、ヴァーチャル・リアリティーです。そうではいけません。私たちが、身体をもって共に集まり、そこで、パンを裂き、ぶどう酒にあずかるのです。

そもう一つの大切なことは、その交わりに、「御父また御子イエス・キリストとの交わり」があることです。私たちが交われれば、そこに御父と御子イエス・キリストとの交わりがあり、また、御父と御子との交わりがあれば、自ずと私たちは共に交わるのです。切っても切れない関係が、教会の中で実現します。ここが、世にあるいろいろな交流との大きな違いです。交流には、横のつながりしかありません。しかし、御子にある交わりには、横のつながりを持つと縦のつながりが強められます。信者が集まると、そこで互いを知り合うこともありますが、それよりも、自分におられるキリストを分かち合うこととなります。互いに、キリストご自身を分かち合っているためです。

そして、キリストの流された血と、裂かれたからだにあずかる聖餐は、その一体を最も如実に表している時と空間です。聖書の文化、いや中東の人々の文化には、「食べると一体になる」というものがあります。同じ食べ物が、互いの体の中に入るので、それでその食べ物によって一つになっていることを示しているからです。アジアの人々に分かり易く話すと、「同じ釜の飯」です。一つに

なっているから、争うことができません。争えば、それは自分の一部になっている人と争うので、自分自身を傷つけることになるからです。

ヤコブとおじのラバンが、対立していたところを、もう互いに害を与えないと契約を交わした時に、そこで食事をしました(創世 31:46)。平和を表しています。みなさん、食事中に争ってみてください。文字通り、食べ物が喉を通らなくなります。お腹が受け付けなくなります。席を立つしなくなるのです。それだけ食事は、平和と一体を表しています。「I コリ 10:16-17 私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。」

⁴これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。

ここです。交わりにある実は、喜びです。単に喜ぶだけでなく、満ちあふれた喜びです。「詩 133:1 見よ。なんと幸福な楽しさだろう。兄弟たちが一つになってともに生きることは。」

主は、ご自身が喜んでおられるし、ご自身のものになった者たちに対して、その喜びを分かち合いたいと願っておられます。イエスは、父なる神に祈られた時、こう言われました。「ヨハ 17:13 わたしは今、あなたのもとに参ります。世にあってこれらのことを話しているのは、わたしの喜びが彼らのうちに満ちあふれるためです。」主ご自身の喜びを彼らに与えたいので、彼らを聖別し、また彼らのことばを聞いて、信じる者たちが一つになることを願っておられるのです。

パウロは、キリストにあって、いろいろな違いからくる壁が崩され、一つになることを話しました。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」やはり、みなさんにいつか味わってほしいことがあります。それは、言語の異なるキリスト者の中で、賛美することです。祈ることです。私たちは、言語があるからこそ、互いのことが分かり合えていると思っています。けれども、言語が分からないのに、キリストにある者たちと一緒にいると、同じ日本語を話す者たち以上に、同じ日本人以上にある、あの一体感はいったい何なのだろう？と、非常に不思議な気分になります。そして、そこには、言葉に言い尽くすことのできない、喜びに満ち溢れるのです。

ところで、ヨハネは、とても分かり易く、この手紙を書いています。「これらのことを書き送るのは」と言っていますね。自分がこの手紙を書いている目的を書いています。ですから、もしこの手紙を読んで、その目的からずれたことを受け止めていたら、それは間違った受け止め方をしているとすぐに分かります。こうなってほしいという目的を、はっきりと述べています。

例えば、他の箇所では、こうなっています。2章1節、「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。」罪をこれまでより犯さないようにするため、という目的を書いています。そして、5章13節、「神の御子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです。」永遠のいのちを、自分は持っていないのではないか？という不安な思いになることが、あります。けれども、この手紙を読めば、自分には永遠のいのちがあるのだと分かるのです。

ですから、はっきりと目的をヨハネは書いていて、ここ1章4節では、喜びに満ちあふれるようになるためです。何か、みなさんわくわくしませんか？長老ヨハネは、主の喜びをこのようにして、信じる者たちに、もっと味わってほしいと願っているのです。

2A 光に歩む 5-10

そして5節から、その交わりにおいて、私たちが光の中を歩まなければいけないことを教えます。

1B 光なる神 5-7

⁵ 私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです。

ヨハネは、自分自身が勝手に語っているのではないことを強調して、「私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信」と言っています。福音書において、主は、ご自身が光であることを何度となく語っておられたことをヨハネは書き記しています。「8:12 わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」そして、この方を信じる者は、光のところに来るが、闇を愛している人は来ないということも言われました。「3:19-20 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。」

ここにあるように、光が示しているのは、正しさ、聖さ、また真実です。パウロが、エペソ書において、「あらゆる善意と正義と真実のうちに、光は実を結ぶのです。(5:9)」と言いました。光は、すべてのものを明るみに出します。真実を示します。善だけが、また正義だけが、その光に耐えます。悪や不正は、光に耐えることはできません。だから、悪を愛している人は、イエスを信じることはできません。悪を認め、悔い改めて、罪を告白する人は、この方のところに来ることができます。なぜなら、神はその人の行いではなく、憐れみによって受け入れてくださるからです。その罪は清めて、赦してくださるからです。

ですから、単純明快ですが、神は光であり、そこには全く闇がないことをはっきりと伝えてあります。

ここに、曖昧なところはありません。光があれば、闇はないのです。光が来れば、闇は消え去ります。神はある時に光で、またある時は闇ということは一切ないのです。

ところで、ヨハネは手紙の中で、「神はこうである」と、はっきり言っていることがあります。他の箇所では、「神は愛です」と言っています。これは、神の本質を示しています。神が愛ではないことは、全くありません。だから、愛ではないことには、神は関わっていません。同じように、ここは神は光であると断言しています。だから、光でないことについて、そこには神は関わっていないのです。神は光であられ、そして愛です。それから離れていることは、一切、神と相いれないのです。

⁶ もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。

ヨハネは単純明快に、この手紙で、言っていることと、歩んでいることに乖離がしばしば起こっていることを話しています。「何々であると言いながら、こう歩んでいるなら」という言い回しをたくさん使います。2章4節、「神を知っていると言いながら、その命令を守っていない人は、偽り者であり、その人のうちに真理はありません。」2章9節、「光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎んでいる人は、今でもまだ闇の中にいるからです。」このような感じで、話していきます。

私たちは、自分たちの言っていることで、他の人々だけでなく、自分自身を偽ることができます。しばしば、キリスト者の間で、そのようなことが起こります。言っていることは霊的だけれども、やっていることが肉的、世的であることです。それは偽りだとはっきりとヨハネは語ります。

当時の異端、グノーシス主義に影響された人々は、知識を崇拜しているので、言っていることは大したことなのですが、やっていることがまるで正反対であることが多かったのです。ヨハネだけでなく、ペテロは第二の手紙で偽教師たちが、人々を肉欲に誘い込んでいる話をしていましたね。パウロはテモテに対して第一の手紙で、言い争って、高慢になっている人の話をしていました。また、金銭を愛していることも書いていました。いかがでしょうか、言っていることは偉く、立派だから、その人は光の中にいるとは、全く限らないのです。

⁷ もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。

光の中を歩んでいるからこそ、互いに交わりを持つことができます。なぜなら、神が光だからです。私たちの交わりは、御父と御子との交わりであることを思い出してください。したがって、私たちが交わる時に、自分が光の中を歩んでいないと、その交わりを保つことができないのです。

教会は、光のあるところです。神がおられるので、光があります。したがって、心に兄弟への憎しみがあつたとしたら、その闇が明らかにされるので、交わりの中に入れなくなります。教会から去っていくことでしょう。どんなにきれいごとを語っていても、自分は礼拝を献げ、奉仕をすることができなくなります。教会によっては、会員や役員会の人たちに牧師が気に食わないと、牧師を解雇するところいうところがあると聞いています。牧師が新しく招聘されても、また追い出します。しかし、その追い出している人が、自ら出ていくようになります。光の中に留まっていないので、交わりができなくなるようになるのです。

しかし、こう考えるでしょう。「光の中に歩むといっても、私はしばしば罪を犯してしまう。教会に
いることはできないのではないか？」ここはとても大切な点です。ここで、ヨハネは「歩む」という言葉を使っています。これは、自分の生きているあり方の全体を示している内容です。ですから、時
につまづいてしまうという話ではなく、習慣的に、何をしているのか？ということをお話しています。

そして、光の中にいるとは、自分に罪が全くないということでは決してないのです。むしろ、自分が罪深き者であるけれども、日々、主の憐れみによって生かされて、罪を犯したとしたら悔い改めて、主の恵みによって罪を犯さないように努めている姿であります。なぜそれが分かるのか？次に、ヨハネがこう言っていますね。「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます」とあります。主は、私たちの罪のために、血を流して、罪を清め、赦してくださいました。そして、その罪清めは、日々の歩みの中でも私たちを洗い清める力を持っています。だからこそ、自分は罪深くとも、神が光の中に住まわられていても、キリストの血がいつもあてがわれているので、交わることができるようにしてくださっているのです。

主がペテロの足を洗った時に、「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」と言いましたが、イエス様は、「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。」と言われました(ヨハネ 13:9-10)。全身は清められているのです。しかし、日々の歩みで汚れてしまいます。それを主が、ご自身の血によって続けて清めてくださいます。

2B 罪の告白 8-10

次、8 節から、今の話を、ヨハネは補強します。私たちが光の中を歩むというのは、へりくだって、自分の罪を告白して、主が清めてくださるという、この方の憐れみの中に生きることです。

⁸もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。

ヨハネは、光の中を歩むということが、罪がないことを意味していないことは、ここにおいて明白です。むしろ、自分には罪はないという事のほうが、自分自身を偽っていて、真理がないことを示し

ています。しかし、グノーシス系の異端者は、自分は知識を得たので光の中におり、だから、罪はないとしました。それは、ただ偽っているだけであり、真理がないのです。

キリストの流された血によって、私たちの罪はすべて取り除かれました。しかし、それは、信じた者に罪がなくなったことを意味しません。しかし、そうやって教える者たちが今日の教会にも忍び込んでいます。御霊によって洗われたのだから、あなたには罪はなくなり、だから悔い改める必要はないのだ、という教えが事実、あります。そのようなことを教えている人たちは、むしろ、罪を犯していても、すでに清められたのだからと言いながら、罪の中に溺れていきます。あるいは、もう罪赦されて、天国に入るのだから、自分の犯した罪について無責任であって良いのだと考えます。

ペテロは第二の手紙で、こうした偽教師たちの悪を暴いていましたね。「Ⅱペテ 2:18-19 彼らは、むなしいことを大げさに語り、迷いの中に生きている人々の間から現に逃げ出しつつある人たちを、肉欲と好色によって誘惑しています。その人たちに自由を約束しながら、自分自身は滅びの奴隷となっています。人は自分を打ち負かした人の奴隷となるのです。」大げさに語ります。語っていますが、行っていること、その歩みは闇です。自由を約束しています。「肉欲から離れなさいなど、そうした束縛こそが律法主義なのだ。私たちはキリストにあって自由を得たのだ。」などといって、再び滅びの奴隷になっているのです。

光の中を歩むということが、罪がない状態になることなのだと私たちは、誤解してしまいがちですが、偽の教えはそういった私たちの過ちを巧妙にを使って、そういった異端に引きずり込もうとするのです。逆に、事実、そう思って、「罪がないようにするのだ」と強い目標を立てて、熱心に罪を犯さないように、「これをやらないようにする。あれを行うようにすると。」と、注意深く歩んでいく人に陥る過ちは、「高ぶり」です。自分は罪をこれだけ犯さないようにしてきたのだから、もっと正しくなっているに違いないと思うのです。それで、高ぶっていることに全く気付かず、盲目になります。それが、パリサイ派が自分がいかに正しいかを神殿で祈っていた過ちですね。取税人が、胸を叩いて、「憐れんでください、私は罪人です」と告白したのですが、それで彼は義と認められました。

⁹ もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

ここです、これこそが光の中を歩むことです。自分の罪を、主が罪だとみなしているように、罪であるとみなすことです。「告白」とは、同意することです。神が罪だという事に対して、それを罪とすることです。私たちは、罪があるならば、どうか示してくださいという祈り心を持ちながら、主の前にへりくだって歩むことが求められます。「詩篇 139:23-24 神よ私を探り私の心を知ってください。私を調べ私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるかないかを見て私をとこしえの道に導いてください。」

ここで罪の告白というものが、「神は真実で正しい方」ということに基づいていることを知ってください。神は赦す方、不義から清める方です。けれども、自分がその罪を罪であるとしなければ、神の処に来ることはできません。神が、罪を赦さないのではなく、罪を赦す憐れみ深い方がおられるのにも関わらず、自分が頑なになって、主のもとに来ないのです。それは、自分の罪、闇を愛しているからで、光のところに来ようとしません。

イエスが、生まれつきの盲人を癒され、彼がご自身を礼拝した後に、そこにいたパリサイ人が、自分は盲目なのか？と尋ねました。「ヨハ 9:41 もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります。」自分が盲目だ、つまり罪を犯したと認めたら、もう罪はないのです。罪は赦されるのです。けれども、私は見える、つまり、罪を犯していないというならば、罪がそのまま残ります。

ところで、主がいかに憐れみ深い方なのかを示す言葉が、書いてあります。「すべての不義からきよめる」という言葉です。7 節には、「イエスの血がすべての罪からきよめる」と書かれていました。すべての不義、すべての罪です。主は、私たちを受け入れるために、どんな罪がなくても、どんなにあくどい罪であっても、それをすべて赦し、清めてくださるのです。預言者エゼキエルが語りました。「18:21-23 しかし、悪しき者でも、自分が犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべての掟を守り、公正と義を行うなら、その人は必ず生きる。死ぬことはない。彼が行ったすべての背きは覚えられることがなく、彼が行った正しいことのゆえに、彼は生きる。わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——【神】である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。」すべての背きは覚えられることはないのです。

私たちの告白にしたがって、神は私たちの罪赦しを決定するものではありません。ある人が私に質問しました。「私がまだ気づいていない罪があって、告白していなければ、罪は残っているのですか？」ととても真面目なクリスチャンですね。それで私はここを読んでもらいました。彼女は、この言葉をよく知っていました。それで、「アーメン」と相槌を打っています。それで私は尋ねます、「ここに、罪はどのくらいきよめる、と書いていますか？」「すべてです」「だったら、まだ気づいていない罪についても、清めるよね、神さまは？」これで、彼女ははっとしました。罪の赦しは、私たちの罪の告白に拠りけりではなく、神の真実と正しさによるのです。

¹⁰ もし罪を犯したことがないと言うなら、私たちは神を偽り者とすることになり、私たちのうちに神のことばはありません。

8 節にある、罪はないという発言は、自分自身を欺く行為でした。ここ 10 節は、もっと悪い発言です。8 節では少なくとも、神が罪と言われていることは罪であるとみなしています。ただ、自分はその罪は犯していないという立場です。ここでは、神が、これが罪であると宣言しておられるのに、い

や、そうではない、それは罪ではないと言っていることです。自分が真実を語っていて、神が偽り者なのだということです。

それで、「神のことばはありません」と言っています。神のことばによって、何が罪か、そうではないかを知ることができます。神のことばで、はっきりとある行為が罪であると指摘しているのに、それを認めないのですから、神のことばが留まっていないのです。聖書で、これだけ明らかに罪であることを明らかにしている者に対して、それは罪ではない、むしろ正しいことだとする世の流れがありますね。イザヤは、「悪を善、善を悪と言う者たち」と呼んでいますが(5:20)、まさにこの通りになっています。ですから、私たちは、罪から離れるには、みことばを心に蓄えることです。「詩 119:11 私はあなたのみことばを心に蓄えます。あなたの前に罪ある者とならないために。」

このようにして、私たちは光の中に歩むこと、それによって神との交わりを楽しむことができることを知りました。そして、私たちの互いの交わりも、御父と御子との交わりなので、光の中で行っていく事です。その光は、私たちの知識があるかないか？ではありません。その光に歩むには、神を神として、そのみことばを、いつもアーメンとして受け入れ、罪があれば告白することです。その中で、神の真実と正しさの中に生きることができ、私たちは喜びにあふれた生活を送ることができます。